

濁流への、あくなき挑戦！

カナディアン・スラローム (C-1 クラス)
現ナショナルチームメンバー、
アトランタオリンピック元日本代表

もちだ まさなり
持田雅誠 選手



最終回 「アトランタ、そして未来へ！」

カヌー競技、カナディアン・スラロームのアトランタオリンピック元日本代表で、B & G 財団の事業にもご協力いただいている持田雅誠 選手に、世界へ羽ばたくまでの経緯やエピソード、今後の抱負などを、連載で語っていただきます。

前回は、世界的に有名なコーチから誘いを受けてドイツに渡った経緯を紹介しましたが、最終回となる今回は、いよいよワールドカップへの参戦、そしてアトランタオリンピックへの挑戦です。

ナショナルチームの誕生

体力的にヘトヘトになりながらも、なんとかドイツでの練習を消化しているうちに、いよいよ 1994 年度のワールドカップが開幕を迎えました。第1戦は英国で、その後、ドイツ、フランスと転戦していきます。もちろん、私としては初の海外レースとなりましたが、このとき日本からもトップ選手がやってきて一緒に参戦することになりました。それまでカヌー連盟の方針としては、国内1位の選手しか海外遠征を認めていませんでしたので、ここで日本のナショナルチームが初めて編成されることになったわけです。幸いにして、このとき以来、私は一度もナショナルチームのメンバーから外れていません。

英国で開催された第1戦は、得るものはたくさんありましたが結果は燦燦たるものでした。面倒を見てくれていたドイツのコーチにしてみれば、それは当然のことであり、まずは経験を積ませることが肝心だと思っていたようでした。それほど、カヌー先進国と日本にはレベルの違いがあったのです。

また、初めて組んだナショナルチームだったので仕方がなかったのかもしれませんが、どの国に行っても日本の選手勢は孤立しがちでした。私は、偶然にも大学でドイツ語を習っていたため、チェコなどのようにドイツ語が通じる場所では役に立ちました。とかく

ドイツ人は、とっつきにくいと思われがちですが、話してみると日本人好きだったりすることが、よくあります。

ワールドカップを転戦すると、1ヵ月に2〜3,000キロも移動しなくてはなりません。宿などの手配は、すでに海外遠征を経験している国内1位の選手にお世話になることができましたが、いろいろな国を訪れても観光する余裕なんてありません。楽しい面もありますが、辛いこともたくさんあるわけです。たとえば、レンタカーを使って移動するのですが、とにかく走る距離が半端ではありませんから、故障して立ち往生してしまうこともあります。そんなとき、英語が通じる場所ならまだ良いのですが、言葉がまったく通じなくて困ってしまう場合もありました。

こうして、ヨーロッパ中を旅しながらあっという間に時間が過ぎていき、9月にワールドカップの最終第5戦が日本で開催されるのに合わせて帰国しました。初めての体験ということもありましたが、この年の海外レースでは、まったく良い面がありませんでした。



また、個人的には外国の生活が、あまり好きではありません。日本に帰ってきて、「ああ、良かった」と感じました。とにかく食事の面が大きいんです。外国にいるときでも、時間があれば、なんとか日本食らしいものを自分でつくって気持ちをなだめています。

オリンピックの切符

翌95年になると、96年に開催されるアトランタオリンピックの予選が始まり、ワールドカップとは別に奇数年に開催される世界選手権も10月にアトランタで開かれました。オリンピックの1次予選は9月に英国で行われましたが、私はアトランタの世界選手権に出ました。世界選手権は、ワールドカップよりもレースのランクが上なので、経験しておきたかったのです。また、96年の4月に予定されていたオリンピック2次予選が、ここアトランタのコースで行われることになっており、私はそこでオリンピックの出場枠を狙うつもりでいたので、そのときのためにコースに慣れておきたかったという面もありました。

世界選手権が行われるコースは、とてもハードです。特に、アトランタのコースは世界でも1、2位を競う難所で、オリンピックの2次予選で私が出たときも何人か病院に運ばれました。日本の川も、洪水のときや雪解け水が流れるときはすごいと言われますが、アトランタのレースのレベルになると、そんな状況をも上回ります。しかも、スラロームで

ゲートをくぐりながら下りるので、テクニックの奥深さを知ることになります。アドベンチャーを求めてカヌーを始めた私ですが、こうしたレベルになるとレースに参加すること自体がアドベンチャーに思えます。

また、カナディアン・カヌーの場合、そんなコースに出て正座しながら漕いでいくわけですから、背筋がとても疲れます。

ですから、日頃の練習では背中を中心とした筋肉トレーニングを欠かすことができません。スタミナはカヌーを漕いでいるだけでも養えますが、筋力アップだけは陸上でのトレーニングをメニューに加えなければ成果が得られません。この場合、腹筋運動にしろ懸垂運動にしろ回数よりも1回ごとの負荷を重視し、腰に25キロのウェイトをつけて



10回の懸垂を行うといったメニューが取り入れられます。回数をこなす筋力ではなく、瞬時に襲ってくる波に対する一発の力が求められるわけです。

もっとも、こうしたトレーニングを重ねた選手でも、アトランタのようなハードなコースに出ると、波に打たれて肩を脱臼してしまうケースが出てきます。何人か病院に運ばれたと言いましたが、前方が見えない強くて大きな波に向かって漕いでいくと、上から覆い被せるように濁流が襲い、脱臼だけでは良いほうで、沈をしてから泳いでいるうちに気を失ってしまうこともあるのです。

そんなコースがオリンピックの晴れ舞台であり、2次予選の会場にもなったわけですから、いきなり参加していたら実力を発揮できないまま濁流に流されて終わってしまったことでしょう。この2次予選をなんとか突破してオリンピックの出場枠を取ってやるという気持ちでいっぱいだった私にとって、すでに世界選手権で同じコースを体験していたということは、とても強い味方になっていました。

ですから、何人病院に運ばれようが、なんとか出場枠に喰らいついてやるという強い気持ちが沸き起こり、そのため、これまでの海外レースのなかで一番とも言える良いレース運びができました。結果は38位という成績でしたが、目標に掲げたアトランタオリンピックへの切符は、つかみ取ることができたのです。

さらなる挑戦に向けて

オリンピック出場が決まると、家族や大学のサークルは喜びましたが、私がオリンピッ

クの出場をめざした理由は少し違ったところにありました。それは、どんな大会でもいいからワールドクラスのレースで 10 位以内に入りたいという強い願望にあったのです。

確かに、オリンピックには特別な価値があると思います。アメリカの選手などは、オリンピックに勝つことで大きなスポンサーが現れますし、東欧の選手などは金メダルを取ることによって生活が保障され、それまでボロボロの服を着ていた選手がピカピカのクルマに乗り始めます。それだけに、選手はみな必死です。私にしても、オリンピックの出場が掛かっているからということで、周囲の理解を集めながら世界を転戦することができましたが、それでも、実はオリンピックに出るということが最大の目標ではなかったのです。

ただし、オリンピックは必死に戦ってきた世界中の選手が揃う大会であり、そのなかで 10 位以内に入りたいという思いもあるわけですから、さすがに本番のレースでは緊張しました。いま思えば不思議なほどです。

現在のオリンピックでは、決勝と予選がありますが、アトランタのときには予選がなく、1 人 2 回のトライで良いタイムの 1 本によって競われました。チャンスは 2 回、そのうち最初のトライでまずまずのタイムの出した私は、2 本目のときに少しでも良いタイムを出そうと無理をして転覆してしまいました。

トップレベルの選手たちは、かならず 2 本目に 1 本目より良いタイムを出します。その精神力のたくましさには目を見張るものがありますが、それは日本のように緩やかな川で乗っていて身につくものではありません。彼らは、同じレベルのライバルたちと常に厳しいコンディションのコースでレースをしており、それなりに場数を踏んでいるのです。

ですから、時速 5 キロの世界とはいえ、1 秒の差が勝敗を分けてしまいます。レースは、だいたい 90 秒で走るコースで行われますが、1 回のミスで 2, 3 秒の遅れが出てしまい、スラロームのゲートに触ると 2 ポイント（2 秒）のペナルティが課せられてしまいますから、文字通り激流のなかで一瞬の油断もなりません。



こうした世界で連戦を重ねる猛者たちのなかで、私は 22 位という成績に終わり、10 位以内という目標には及びませんでした。ただし、このオリンピックのレースだけではなく、ワールドクラスの大会に出るたびに思うことなのですが、経験の積み重ねが大切なのです。ですから 22 位という成績ではありましたが、オリンピックに出たことで新たな目標に向かう原動力が沸き起こりました。

それは、一度でいいからワールドカップなどの国際大会で 15 位以内に入るということでした。当時、ワールドカップでは予選で 15 位以内に入れば決勝に進出することができました。つまり、世界の選手のなかで決勝に残るだけの力を身につけたいという目標であり、それ

が達成できるだけの感触をオリンピックに出たことで得ていたのです。

しかし、オリンピックが終わると、家族からは「そろそろ就職しろ」と言われて仕送りが半減してしまい、すでに休学を3回もしていた大学を今後どうするのかという問題も出ていました。いま考えれば、もう少し方法があったのかもしれないと思いますが、当時、オリンピック・キャンペーンのスポンサーになってもらえないかと300社ほどの企業に手紙を出しましたが、色よい返事は1つもありませんでした。

「このままでは終えられない!」、「オリンピックが最終目標じゃないんだ!」。そう説いたところで、誰も耳を傾けてくれません。やむなく、工場の期間作業員となって生活費を稼ぎながら多摩川で練習を続けましたが、もう世界を転戦するだけの資金も時間もありませんでした。結局、オリンピックの翌年に行うことができた海外遠征はブラジルの大会だけであり、そのときの成績も過去最低の記録となってしまいました。

理由は分かっていました。国内だけで練習していたからに他ありません。とにかく日本のコースはやさし過ぎるのです。いまでは、富山に2000年の国体に合わせて作られた良いコースができていますが、これは地元のカヌー協会やクラブの方々の努力によるものです。おそらく、海外のレースを知っている人が力を入れたのだと思いますが、その富山のコースでも普段は水の量が十分ではありません。練習のときだけでもダムが放水してくれたらいいのですが、なかなか難しいようです。

外国では、ダムの近くに市や国のコースがつくられており、電力会社がスポンサーになっているケースもあります。こうしたところでは、十分な水量によって満足な練習が行われています。「ダムは危険な場所、半径何メートルは近づくな」などと言っている日本では、おそらく電力会社と交渉して練習の水を確保するといったことなど、これまで行われたことはないと思いますし、カヌーにそこまで便宜を図るという発想もなかったと思います。チェコなどでは町を流れる川に公共のコースができていて、一般の人たちも思い思いにスラロームを楽しんでいます。こうした文化や歴史の差が大きな壁となって立ちちはだかっているように思います。

レジャーで楽しむカヌー人口は日本でもかなり増えましたが、競技に関しての環境はまだまだ発展途上です。スポーツは、1人でもスーパースターが登場すると、一気に世間の関心を集めて普及し始めます。その誰かがカナディアン・スラロームの世界に誕生することを夢見ながら、私自身、いまもなお目標に向かって練習に励んでいます。

完

※ この談話は昨年末に収録されたもので、現在、持田選手はアテネ・オリンピックの出場選考レースに向けて練習に励んでいます。アンドリーでは結果が出次第、新たな話をお聞きする予定です。がんばれ!持田選手。